

◆家庭にも問題がある

もちろん学校の問題だけではなく、家庭の問題も大きいです。

○テレビ、ゲーム機、ネット等のメディアに長時間触れさせている。

○習い事、スポ少、塾等で忙しい毎日。

○基本的な生活習慣の乱れ（早寝早起き、三食きっちり食べる。砂糖・添加物の取り過ぎ等）

○怒鳴る、命令する、奴隷のように扱う。

そんな状態ですから、発達障害と言われる状態の子が増えるのも当たり前です。

ただ、ほとんどは育った環境による場合が多い（後天的・人為的）ので、私の教室に来る家庭には次のようなアドバイスをします。1ヶ月もすると子どもの状態は大きく改善します。

これは、学校としては保護者に啓蒙するほかないでしようが、子どもへの接し方、環境の与え方などは参考になると思いますので紹介します。

○親は、怒鳴らない、急かさない、否定しない、命令しない。

○勉強（宿題も）制限（落ち着いたらどんぐり式の文章問題を週に1~2問やる）

○高速計算・反射学習は厳禁（計算プリント、算盤、フラッシュカード・暗算等）

○ゲーム機、テレビ、ネット等のデジタルメディアに触れる時間をゼロに近づける。

○習い事もゼロに近づけ、のんびりした毎日を心掛ける。

○外遊び・自然の中で遊ぶ時間を増やす。

○学校は行きたくない時は行かなくていい環境にする

○スナック菓子、清涼飲料水、菓子パン、その他添加物たっぷりの食品をやめる。

○砂糖を減らす。

さらに、小児科の現場から世の中に警鐘を鳴らし続けている方の書籍も、子どもたちの教育に関わる先生には是非読んでいただきたいです。

メディアにむしばまれる子どもたち

（著）田澤 雄作



『笑顔や理性を司る「前頭葉」はゲームをすると活動が鈍くなるが5分ならすぐに元通り、しかし、15分ゲームを続けるとそうはいかない。』

『幼いうちから進学競争に駆り立てられる今の社会は、考えたり想像したりする手間を省いて丸覚えですますのが得意な子どもたちに、とりあえずは有利なようにできている。丸覚えが得意な子は学校では良い成績がとれるので親は安心してしまい、問題に気づかない。』

「学校も部活も塾も頑張っているから大丈夫」「勉強ができるから大丈夫」という勘違い、「勝利至上主義のスポーツの弊害」、「早期教育・進学競争社会の功罪」にもしっかり触れています。

就学前からゲーム機を与えるような親が増えていきますので、保護者に読んでもらう機会をつくって「メディア漬」の子どもを減らしていかないと、先生たちの負担はますます増えていくことになります。

◆理由はわかっている

小4～高学年から算数の授業についてこれない子が増える、躓く子が増えるのは、決して学ぶ内容が難しいからではありません。小1に比べれば小4の内容は難しいでしょうが、それは当たり前です。

抽象的な概念の単元が増えてくるという意見もありますが、それも要因の一つとしてはあげられますが、微々たるものです。

理由はわかっています。

『世界一素敵な学校—サドベリー・バレー物語— ダニエル グリーンバーグ (著)』という本は、カリキュラムも、点数も、卒業証書もない世界一自由な学校と言われるアメリカのサドベリー・バレー校の物語です。



この本の中には、6年間かけて学ぶはずの算数を、半年の授業（1回につき30分、週2回、24週なので、実質24時間）で習得したことが書かれています。そして、初等数学の専門家の意見も添えられています。

「教科それ自体は、そんなに難しくありません。

では何が算数を難しく、ほとんど不可能にしているかというと、嫌で嫌で仕方ない子どもたちの頭に、無理やり教科を詰め込んでいく、あのやり方のせいです。

毎日毎日、何年もの間ずっと、少しずつハンマーでたたき込んでいけば、さしもの子どもたちもいずれ覚えるだろう、というあの考え方です。

しかし、うまく行くわけがない。

だから、見てごらんください。この国の6年生の大半は、数学的な意味で文盲じゃないですか。

結局、わたしたちがなすべきこと、それは、子どもたちが求めたとき、求めるものを与えることなのです。そうすれば、まあ、20時間かそこらで、彼・女ら、きっとモノにしてしまいますよ。」

私の息子たち、教室でみている家庭環境のアドバイスまで届いている子たちなら、小学校で算数の授業を一切受けなければ、小6の終わりの1ヶ月間で6学年分の算数を楽にマスターできるでしょう。

実際にはそのようなことは困難なので、家では宿題禁止、学校ではできるだけ計算問題はゆっくりやって、終わらなかつた分は家に持ち帰っておいでと言って子どもたちを守っています。

学習指導要綱に縛られた学校では、この本のようなやり方は出来ないのはわかっていますが、「子どもの能力の素晴らしさ」と「算数という教科の容易さ」と「無理やりやらせる悪影響」を理解しておく必要はあります。

子どもたちは賢いのです。それを潰さなければ、義務教育の勉強程度が理解できないなどと言うことはありえないのです。義務教育の文章問題がわからないなどと言うことは本来おかしいことなのです。

◆時代が変わった

ひと昔前まで、子どもたちは生活と遊びの中で学力の素となる力をつけていました。さまざまなことを感じ、味わい、工夫する日常がそこにはありました。小中学校で習うような事柄は、経験の中ですでに知っているようなことが多かったのです。知らないことでも、自分の経験と結び付けて想像できる土台ができていました。「考える力」とは「工夫できる力」です。生活と遊びの中でさまざまな工夫をしていた頃は、子どもたちの「考える力」は自然に育ったのです。

生活と遊びの中で身についた「考える力」「学力の素」があったから、抽象的な教科内容を理解することもでき、「読み書き計算」という「考えない反復学習」の弊害もあまり受けなかったのです。

しかし、時代は変わりました。

子どもたちの生活環境、遊びの環境の悪化は目を覆うばかりです。

「便利」＝「工夫を必要としない、させない」生活と、テレビ、インターネット、そして携帯型ゲーム機・スマホの普及は子どもたちが「考える力」「学力の素」を育てる機会を根こそぎ奪いました。

もはや、自然には思考力は育たない時代です。

そして、これは全世界共通です。

これに追い打ちをかけているのが、学校教育での、さらに家庭や学習教室での「読み書き計算」の徹底です。学校教育の現場が子どもたちの学力低下に危機感を持つのは当然のことでした。ゆとり教育が不安をかきたて、保護者も危機感を募らせました。しかし、「学力は勉強する中でつけるもの」「学力の基本は読み書き計算」という思い込みを元に教師、指導者、保護者が行う努力は、さらに「わからない」「考えられない」子どもたちを大量に増やしているという悪循環になっています。

- 教科書はスラスラ読めるのに、意味を理解できない。
- 漢字テストは100点なのに、その漢字を使うことはできない。
- 計算は速いのに、文章題は苦手。
- 九九は言えるのに、かけ算の意味はわかっていない。
- 「長方形のまわりの長さは？」と聞かれているのに反射的に、「縦×横」としてしまう。
- 「倍」と聞いただけで即かけ算をしてしまう。
- 解き方を教えてもらわなければ、自力でひとつの問題も解けない。
- ゲーム機がないと、遊べない。何をしたらいいのか思いつかない。

多くの日本の子どもたちの姿です。

そして、大人になったこれらの子どもたちは自分では何も考えられない、生み出せない「指示待ち族」「マニュアル人間」と呼ばれる社会人になり、これもまた問題化しています。

これらの問題に対して、「読み書き計算」の徹底は解決策にならないばかりか、問題を悪化させています。なぜなら、機械的に、速く、何かを処理するという作業は「考えていてはできない」からです。

「読み書き計算の徹底」＝「考えない頭・考えない習慣の強化」なのです。

◆気がついたこと

①子どもたちにさせる問題が多すぎる。

算数の授業及び演習を見てきましたが問題数が多すぎです。終わらないと宿題になるという状態では、子どもたちはわからない個所を時間をかけて教わろうとせず、ただ答えだけを知りたがり、内容はどうでもいいからとりあえず終わらせようとします。答え合わせで正解を書き込んで次のプリントへいく子が多いのは当たり前です。

②悪影響を指導者が知ることに。

単純な計算問題を45分間やり続けることが、どれほどの悪影響かを身を以て指導者が経験すべきです。子どもの思考力を守り育てるアドバイスをしている身としては、45分間の計算プリントやドリルは、その影響を考えると「虐待」以外の何物でもありません。義務教育程度の文章問題が「わからない」頭にさせられてしまうのですから。

是非一度、先生方が学習支援の先生方が集まって45分間、単純な計算問題をやる研修をしてください。

③理解させる授業を

例えばわり算。割り算の意味を理解している子は皆無です。筆算が出てきたとたんに、「 $400 \div 2$ ってどうやんの？」 「 $56 \div 8$ っていくつだっけ？」 「 $80 \div 2$ ってどうやんの？」 「 $55 \div 5$ わかんない」と言い出す子が多すぎるのは、小3で割り算を理解させていないからです。

いくら大量に穴あき九九やわり算プリントをさせても理解は深まりません。わからないということは絵に出来ないということです。絵図で説明し、自分で絵図を描きながら理解する時間を増やせば解決します。

④大人のマイナスの言葉が子どもの情緒を不安定にしている

子どもたちに対して、命令形、指示、ダメ出し、否定の言葉が多いです。常に誰かが注意されている、叱られている状態では、それを聞いている子たちの情緒が安定しません。情緒が安定しないと勉強どころではありません。私が最初に学校に入って驚いたのが、子どもたちがお互いにルールを守らせようと注意し、叱り、手を出しあう異常な光景です。でもそれは大人の真似をしているだけです。

⑤宿題は吟味する必要がある

私が息子たちに宿題をさせない理由は、「頭が悪くなる」「実体験の時間が減る」「親子でバトルになる」「情緒が不安定になる」「考えようとしなくなる」そういった理由があります。厳選された良質な宿題なら少しはさせても良いですが、本来家庭の管轄である家庭学習にまで踏み込むのであれば、手抜き計算ドリルや漢字ドリルは出さないでほしいと思います。

【参考】

算数の教材に「計算ドリル」がある。「漢字ドリル」もある。

細長い練習帳で、1ページに20問位が出題されている。

「漢字10回」といえば、ノートに、同じ漢字を10回ずつ書くことになる。毎日のように宿題にされる。子供は、最初「へん」だけを書き、あとから「つくり」だけを書くようになる。

ドリルは、40年位前から急速に広がった。「何回も練習させる」が広がった理由だが、実は害の方が大きい。

京都大学で開かれた「日本教育技術学会」で発達障害を専門とする医師は、次のように発言した。

「計算ドリルは、同じ問題を何度もやらせるが、意味がない。できた問題を何度もやらせると、算数嫌いな子も出てくる。できなかった問題を教師が教えていない」

私も全く同じ考えだ。

「できた問題を何度もやらせる」のは害の方が大きい。

「できない問題を教える」ことをしないのでは意味がない。

「計算ドリル」「漢字ドリル」は害の方が大きいのに、なぜ使われるのか。

それは「授業中やらせておく」と教師の手があくからである。

「宿題としてやらせる」と親のうけがいいからである。

「教師が指導する」ことをしない手抜き教材なのである。

【プロフィール】 向山洋一 むこうやま・よういち

30年以上の教員経験。代表を務める「TOSS」(教育技術法則化運動)は全国の教員約1万人が参加。(2014年4月12日 産経ニュース)

◆子どもたちに表れている異変

さて、子どもたちをよく観察してください。

●計算スピードが速く、勉強ができる（沢山家庭や塾でやらされている）子たちには次のような特徴があるはず。「表情が硬い」「笑顔がとぼしい」「大人びている」「せかせかしている」

●計算スピードが遅く、勉強が出来ない（と思われる）子たちのほうが、子どもらしい表情が残っているはず。（ネグレクト状態の子はその限りではありません）

●スポ少、習い事、塾、家庭学習で忙しい子たちは、ストレスがたまってイライラしているはず。そして、勉強ができて心も育っていないような言動を見せる子もいるはず。

●計算ドリルや計算プリントをさせると、子どもたちは拒否反応を示し、表情が暗くなり、イライラするはず。「頭が痛い」「頭がおかしくなる」そういった事を訴える子もいるはず。

小学校での大量の計算問題・漢字書き取り学習は、本来賢い後伸びする自然派保育の子たちを早い段階で潰してしまいます。また、それとは逆に家庭で早期学習・反復学習に慣らされた子たちも、一部を除き中学からついていけなくなる「満点落ちこぼれ現象」を引き起こします。

一部では中1ギャップなどと言われていますが、「満点落ちこぼれ現象」とは、学力面に関して小学校の間は勉強が得意、成績優秀だった子が、中学校になって、ガクッと成績が落ちて、落ちこぼれる現象です。

ギャップというと、変化に戸惑う、驚く、不安から、というように何か、しょうがないことのような印象ですが、ようは、簡単なレベルの問題を、たくさん、繰り返しやって点数をとってきた子が、多少難易度があがっただけでついていけなくなるだけです。

テレビやゲーム、与えられた習い事の場などで、ゆがんだコミュニケーションに慣れた子が、多様な人間関係に対応できなくなるだけです。

私の教室にはこうした声がよく届きます。

「知り合いの息子さんが、この中1ギャップです。小学校時代はトップクラスだったのに・・・と本人はもちろん、お母さんもどうしたらいいのか頭を抱えています。金森先生の言われている「悪しき習慣」がこびりついてしまっている子です。理社のテスト勉強は、とにかく書いて覚える方法で何時間も机に向かっていたそうですが、広い期末テストの範囲はとてカバーしきれなかったようで、撃沈。学校の言うまま親子でまじめに取り組んできて、この結果は悲劇です。せめて現在小3の弟君は少しでも守れるように、日常をゆっくりじっくり味わうことの大切さを伝えましたが・・・痛々しくて、臨界期の事など、詳しいことは言えませんでした。」

小学校で出来る具体的な取り組み

新しいことをやる必要はそれほどありません。わずかな工夫で、子どもたちは自分で理解し成長していきます。明日からできる簡単な取り組みをいくつかご紹介します。

①指折り算/指を使わせる。

「指を使わないで、頭の中だけでやりなさい」この指導はマイナスです。感覚再現が最も容易にできるようになっている「指（折算）」は絶対に、使わなければならないものです。自然に指を使わなくなるまで自由に使わせると子どもたちの心も安定します。繰り上がり、繰り下りの計算を、両手を使って簡単にできるやり方（デンタくん）もあります。

②文章問題は絵図を描かせて解かせる。

文章問題の数字に丸をつけて、「あわせて」「全部で」「残りは」「違いは」などのキーワードに線を引かせて「足し算」「引き算」を判断させて式をたてさせる指導はマイナスです。文章を読まなくても、理解していなくてもただの計算問題として答えを出せるやり方なので、パターンに合わない問題に出会うと手も足も出なくなります。自分で絵図を描かせて、絵と筆算で答えを出させ、最後に式をたてさせるとつまずく子は激減します。ただし、問題数を減らさないと子どもは絵を描きたがりません。その単元を理解するのに役に立つ1問を選んでさせるといいでしょう。

③IF（イメージフィックス）法/漢字 ※1

漢字を覚えるには、書く練習ではなく思い出す練習をするのが効果的です。大きな見本を見せて、目で覚え、頭の中で書く（思い出す）練習をすれば簡単に覚えられます。綺麗な字を書く練習をする場合は、右利きの子は左に見本がある、左利きの子は右に見本があるプリントを使って少量をじっくりやるのが効果的です。何度も書かせると漢字嫌い、勉強嫌いを増やすだけです。

④トライアングルナンバーズ ※2

九九を上り、下り、ランダムで速さを競わせることは不要です。トライアングルナンバーズの数字の組み合わせをイメージで覚えるだけで、掛け算、割り算、分数にまで利用できます。九九を忘れた小3生～にも配って、テストの時以外はいつ見てもよいようにしておけば自然と覚えてしまいます。

⑤間違いを消さないでとっておく

何をどう間違えたか、これはとても大切な情報です。全て消しゴムで消して正解を書かせると、その大事な情報が無くなり、同じ間違いを繰り返します。間違えたところが大事、そこを大切にするようにしてあげましょう。

⑥スピードを求めない

早く、速くは小学生では不要です。

自分のペースでできないと大人でもミスを連発し、じっくり考えられなくなります。

大量に問題を解かせる必要はありません。少ない問題をじっくりしっかり考えてやるようにすればいいのです。

終わらないと休み時間が無くなる、居残りさせられる、タイムをクリアしないとペナルティーがあるといった環境では深い理解など不可能です。

必要なら6年生の3学期に短期集中でトレーニングすればいいんです。

理解力と思考力を高めることのほうを優先してください。

⑦単純な反復練習を減らす

計算ドリル・計算プリントを減らす。

今まで20問やっていたところを1問に減らすくらいが丁度いいでしょう。

1問をしっかり確実にやればいいのです。

理解していればゆっくりでもいいのです。速さは後からついてきます。

危険なのは理解していなくても大量にやることで出来てしまうことです。

何度も何度も反復でやらせるのではなくて、何度も何度も理解できるように説明してあげてください。

⑧怒鳴らず、命令形を減らす

叱るときに怒鳴ると、叱られていない子の心にも大きな影響を与えます。

情緒が不安定になり、ビクビクして言われたことを言われた通りこなすことに意識がいき、思考が止まります。

いちいち具体的に指示しないと動かないようになりますから先生が大変です。

(親もとても辛い想いをしています。)

そのストレスが心の中にとどまる子、もっと弱い子に吐き出す子、家で爆発させる子、様々ですが決して先生のクラス運営のプラスにはなりません。

命令形も減らした方が良いでしょう。命令されると誰でも嫌な気持ちになります。

子どもたちに笑顔で接したら、きっと笑顔をかえしてくれるはずですよ。

これだけでも学力は確実にあがり、生徒も先生もとても楽になります。そして学力は驚くべき高水準になります。プラスして「思考力を育てる文章問題を絵で解く学習」と「間違えた問題を切り張りしたノート作り(宿題にするのが理想的)」をすることができれば、子どもたちに無理をさせることなく、穏やかな心と賢い頭を育てることが出来ます。

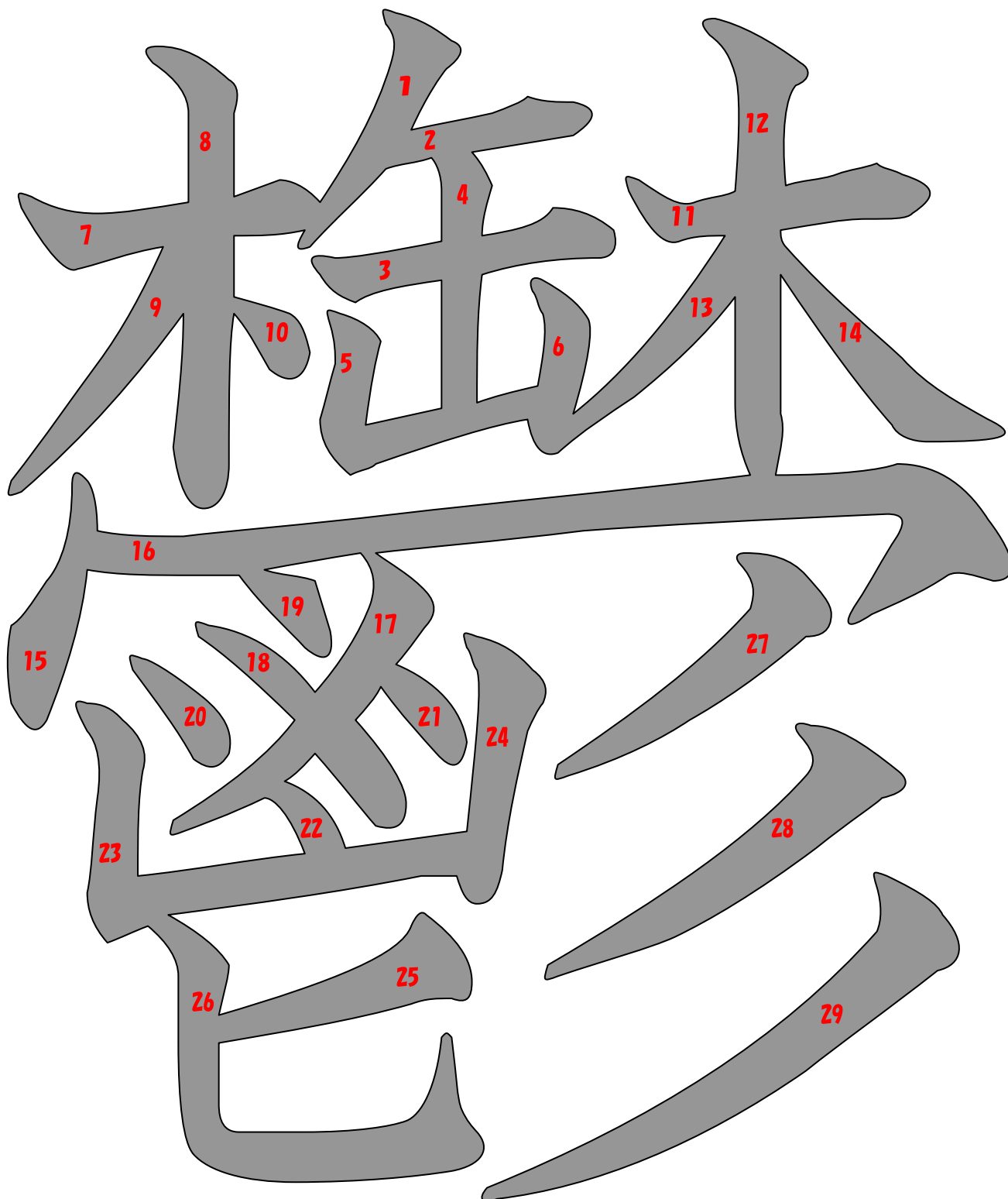
6年間続けたら、間違いなく全国トップレベルの学力の小学校になります。

※1【漢字学習/IF 法】

漢字を覚えるには、「書く練習」ではなく「思い出す練習」のほうが効果的です。

《学校でのやり方》

- ①漢字の読み、意味を教える。
- ②子どもたちを集めて、黒板にお手本を大きく書く。
「何回か目でなぞってみて、覚えられたかなと思ったら目をつぶって頭の中で書いてごらん。」
「思い出せない所があったら、すぐに目を開けてお手本をみて確認してね。」
「覚えたら、また目をつぶって頭の中で書いてごらん。頭の中で最初から最後まで書ききれたらもう覚えているよ。」
「ために、黒板のお手本を見ないでノートに1回書いてみよう。書けなかったらもう一度黒板を見て覚えてみよう。」



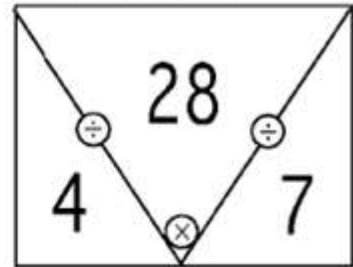
※2【三角計算表】

九九の暗唱は「上り、下り、ランダム」などをやる必要はありません。かけ算・割り算・分数までを意識した数字の組み合わせを、じっくりIF法で覚えればいいのです。そうすれば、九九は36パターン覚えれば対応できますし、せっかく教えたかけ算の概念が、九九の暗唱のせいで消えてしまうようなことがなくなります。(例：九九の後で、「 8×12 は？」と聞くと、「習ってない」と言いだす。)

思い出せない小3～6年生にはテストの時以外、いつでも見ていいと言って渡せば、九九の組み合わせを視覚イメージで何度も見ることで、半年もあればほぼ覚えてしまいます。九九を覚えていない、パッと思い浮かばないというだけで、算数が苦手、勉強が出来ないと思わせてしまうのは可哀想です。

△トライアングルナンバーズ・三角計算△

【掛け算・割り算】→
※下の36マスは掛け算九九



4 2	6 2 2	8 3 2	10 4 2	12 5 2	14 6 2	16 7 2
16 2 8	18 2 9	24 3 8	27 3 9	30 4 7.5	35 5 7	42 6 7
21 3 7	24 3 8	27 3 9	36 4 9	40 5 8	45 5 9	54 6 9
28 4 7	32 4 8	36 4 9	42 6 7	48 6 8	56 7 8	63 7 9
40 5 8	45 5 9	56 7 8	64 8 8	72 8 9	81 9 9	90 9 10
49 7 7	56 7 8	63 7 9	72 8 9	81 9 9	90 9 10	100 10 10

子どもの賢さを守り育てる学習（どんぐり式学習）

息子たち、教室に来る子達は、幼稚園児でもこういう問題を教わらずに自力で答えを見つけます。

（字が読めない子には、問題文を読んであげます）

<S6級-06>★

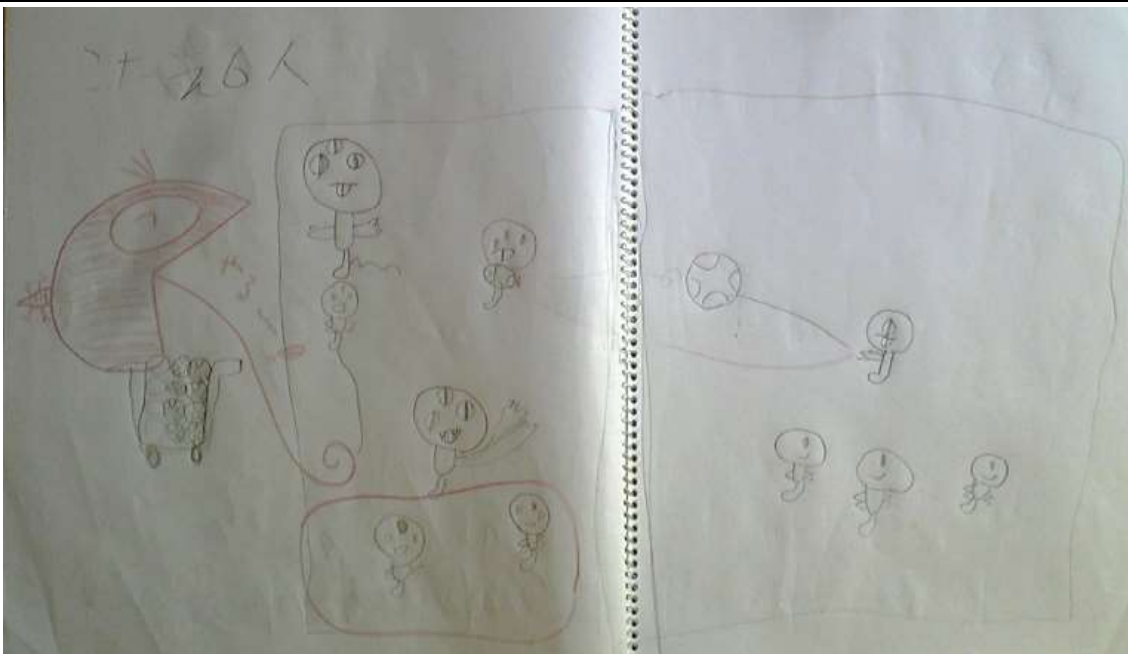
兎のぴよん助がジュース屋さんで働いています。3本の人参から2杯のジュースが作れるそうです。今日はジュースが8杯売れました。全部で何本の人参を使ったでしょうか。



小1で、こういう問題を教わらなくても自力で答えを見つけます。

<S5級-05>★★

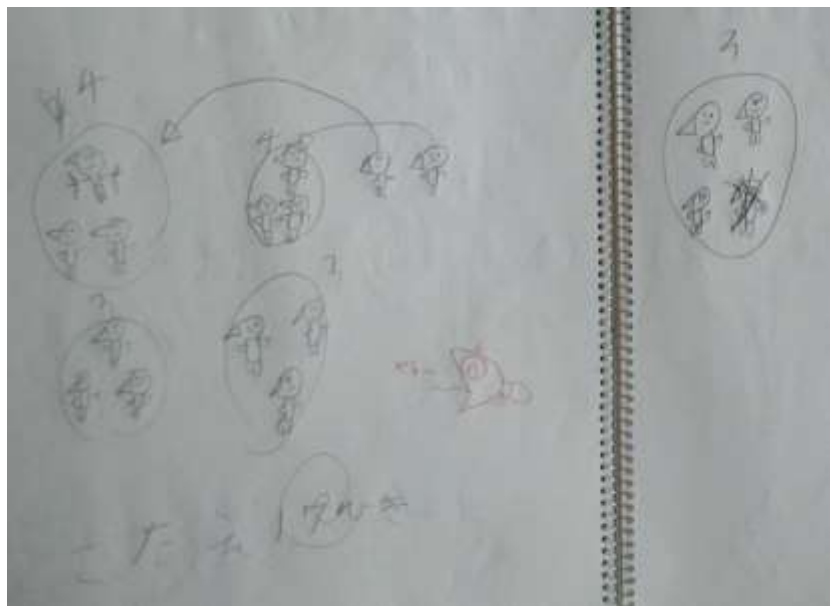
三つ目小僧チームと一つ目小僧チームがドッジボールをしています。三つ目小僧チームのほうが2人多いようです。全員の目の合計は22個です。三つ目小僧チームは何人いるでしょうか。



小2ではこういう問題を自力で簡単に見つけます。

S5級-44★★

ひよこ組のお友達が、3人ずつの班をつくったら2人あまりました。班の数は変えずに4人ずつにしようとしたら3人足りませんでした。ひよこ組は全部で何人いるでしょうか。



幼稚園児～低学年の子には、問題文をゆっくり読んであげます。何度もは読みません。基本、1回しか読みません。少し読んで絵にして、また少し読んで絵にしていきます。

字が書けない子でも、難しい文章問題を考えることができるのです。つまり、思考力は多くの言葉を知っていること、漢字を沢山書けることとは関係がないのです。

何度もいいますが、こういう力を潰さないために、息子たちや教室でみている子たちには計算ドリルや漢字ドリルなどの「考える力を潰す」学習は極力減らしています。やらせると絵を描いて考えることができなくなるからです。

これは、子どもの思考力を確かな理論に基づいて育てたことがない先生方にはわからないと思います。理論を知らず、経験がないのですから無理もありません。だから責めるつもりはありません。ただ学んでほしいと伝え続けるだけです。

絵を描くということ

脳内言語はイメージです。文字ではありません。だから字が読めない、書けない幼児でも「考える事」ができるのです。言葉を聞いたり読んだりすると、その言葉から瞬時に視覚イメージが再現されます。再現される視覚イメージのもとになるのは実体験です。

しかし、今の子は実体験も少なければ、親子のコミュニケーションも希薄なので、「言葉」と実際の「具象物」を日常生活でつないでもらっていません。だから言葉が伝わらないのです。

「わかるとは、言葉から視覚イメージを再現すること」

「考えるとは、再現した視覚イメージを操作すること」

「覚えるとは、視覚イメージを思い出すこと」

算数の文章問題の一つ一つの言葉を、ゆっくり丁寧に絵にして解くというのは、絵を描きながら深く理解し、考える力を育てるとても良い学習方法なのです。

さらに言えば、面白い文章問題であれば子どもたちは楽しくお絵かきに取り組みますし、イメージを再現するときに、そのイメージの元となった様々な体験を思い出し、その時の感情まで再現します。

「優しい心」を育てるのにも効果的だとは思いませんか？

少なくとも、やるとなると途端にイライラしだす計算ドリルとは比べ物にならないほど心も頭も育ちます。これは私自身何年も実際にやっていることですので保証します。

たった、週に1問（45分授業）で十分です。

自由に印刷して使っていいように、教材は前校長先生にCDでお渡ししています。

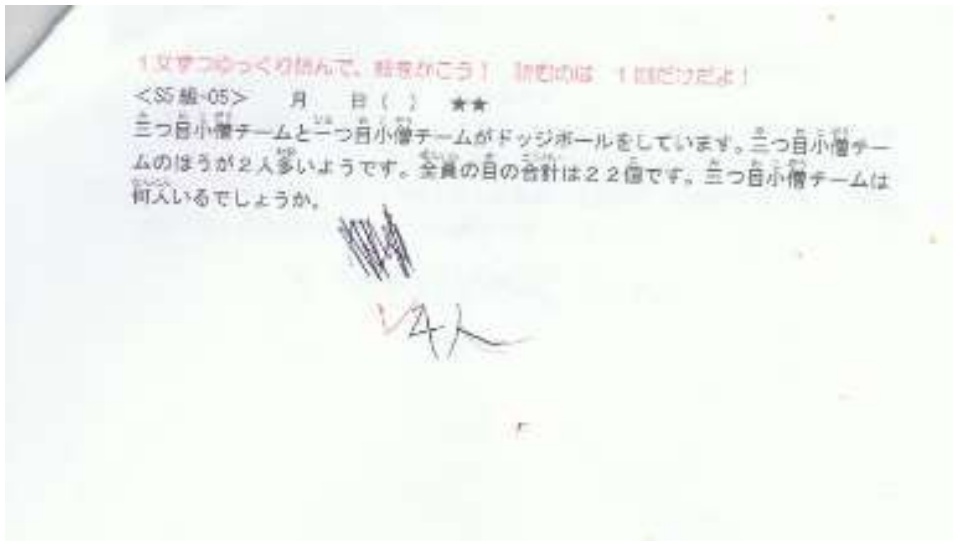
他にも、教務主任の先生、数名の先生にはプリントしてお渡ししてあります。

子どもの変化

思考力を育てるとどんぐり式の学習に最適な年齢は5～7歳です。まあ9歳までならいい時期です。小学校で大事なのは小1～小3の間です。この時期に単調な計算問題の反復学習をさせると、反射的に反応する思考回路が強化され、じっくる考えることが難しくなります。

では、高学年は手遅れか？ 手遅れではありませんがそれまでに育った環境によってはかなり難しい子もいますが、毎日子どもたちが通う学校で、正しい理論で子どもたちに指導すれば、下の例程度なら無理なく伸びます。もちろん、今の指導要綱の内容に沿った形で、無駄な学習時間を減らした分、週に1時間程度の時間を「考える学習」に充てるだけで可能です。(正しいやり方がありますので、勝手にやって失敗するよりは、聞いてください。)

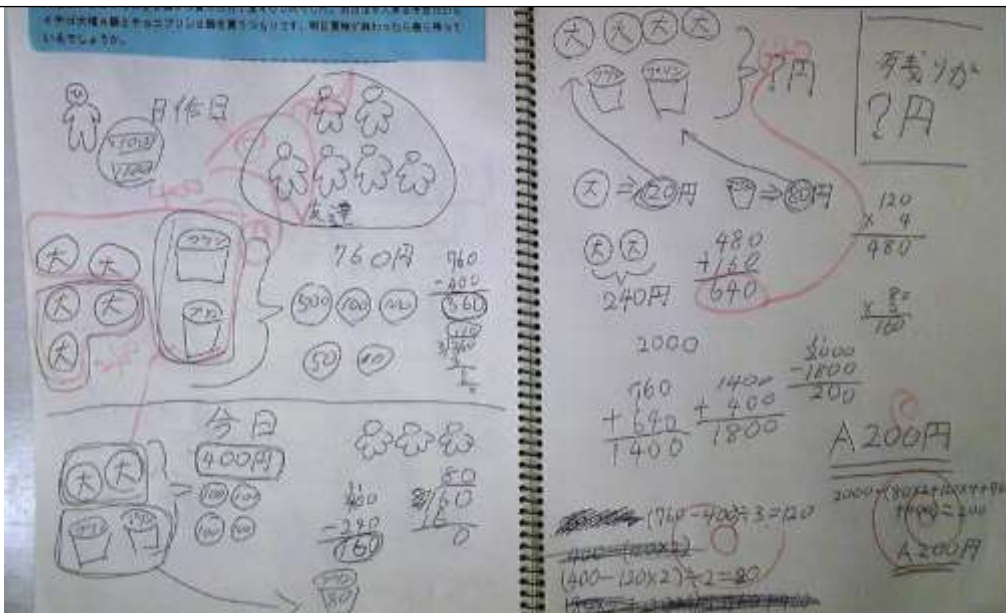
初日 (小5)



9か月後 (小6)

<S1級-12>★★★★★★

ひなちゃんは、昨日2,000円持っていましたが友達が6人遊びに来たので、イチゴ大福5個とチョコプリン2個を760円を買いました。今日も友達が3人遊びに来てイチゴとチョコプリンを2個ずつ買ったらず度400円でした。明日は5人来る予定だからイチゴ大福4個とチョコプリン2個をかうつもりです。明日買物が終わったら幾ら残っているでしょうか。



トルコの学校の例

ブログ：アンカラママの子育て2

<http://ankm.blog96.fc2.com/>

幸せな先生

ひさしぶりに、前の私学の、どんぐり大好き担任の小3クラスを訪ねた。

5-7歳までどんぐりをした集団だ。

アンカラママが学校を辞めてからも、先生は絵で描いて解きなさい、と教えていた。

間違えてもいい、やってみなさい、と。

先生「この子たちは怪物よ。先日の業者テストで出た単位換算の問題も、まだ授業でやってないのに、3-4人を除いて、全員が正解してたわ。去年、あなたと一緒に、mとcmが出てくる問題、やっていたわよね。この問題見てよ、こんな大きな数の割り算も、工夫して解いてしまうのよ。順番に引いていってね。もう、私は子供たちが愛しくて、可愛くてたまらない。毎朝、子供たちに会いたくて、学校に飛んでいくのよ。」

コメント

>5-7歳までどんぐりをした

●この時期に「どんぐり」体験をしたのなら、頼もしい限りですね。

• 2016-04-27 07:58

レオン

レオンくん、コメントありがとうございます。

子供たちが、穏やかに笑っていて、いかにも賢そうでした。

3年生なのに、まるで高学年の雰囲気なんです。

先生と素晴らしい信頼関係ができていましたね。

公立小4の先生が、空回りして、「あと2か月で学年が終わるから、この苦しみも終わる」と言っているのとえらい違いです。

2016-04-27 16:18

アンカラママ

※どんぐり…どんぐり倶楽部 / 健全な子育てと教育の理論と具体的な手法を公開している。

※レオンくん…どんぐり倶楽部主宰 糸山 泰造氏

このブログはトルコのアンカラで、我が子をどんぐり倶楽部の理論で育てているお母さんが、多すぎる息子の宿題をやめさせたら算数がクラスでトップになってしまったことから、その学習理論と学習方法を学校で実践した記録です。先生方には、ここに出てくるような幸せな先生になってほしいと思っています。